

芥川龍之介文学と知識人

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 佳高 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20270

2019年1月24日

「博士学位請求論文」審査報告書

(審査員) (主査) 文学部 専任教授

氏名 宮越勉 ⑩

(副査) 文学部 専任教授

氏名 竹内栄美子 ⑩

(副査) 専修大学 文学部 専任教授

氏名 高橋龍夫 ⑩

- 1 論文提出者 金子佳高
- 2 論文題名 芥川龍之介文学と知識人
(英文題) The Works of Akutagawa Ryunosuke and His Contemporary Intellectuals
- 3 論文の構成
 - 序章
 - 一、知識人の時代
 - 二、芥川龍之介文学と知識人
 - 第一章 芸者の恋と欲望する語り——「片恋」論
 - 一、お徳は不幸なのか
 - 二、「片恋」と「名花」
 - 三、お徳の物語
 - 四、友だちの語り
 - 五、語りの欲望の背景と意義
 - 六、貧を描かないということ
 - 第二章 日清戦争と語りの戦略——「首が落ちた話」論
 - 一、立場をもたない語り
 - 二、中国賊視の語り
 - 三、語りの重層性
 - 四、知識人たちの欲望
 - 第三章 軽薄な知の系譜と知識人——「葱」論
 - 一、女給の時代
 - 二、田中君と「作者」

- 三、お君さんと「作者」
- 四、新中間層の主婦への道
- 五、自立した女性
- 六、知識人と大衆との関係

第四章 正系知識人を特権化する差異化戦略

——「秋」における<インテリ女性>と<新中間層>

- 一、二つの表象
- 二、同性間関係のジェンダー間格差
- 三、産業化適合的な価値観
- 四、信子と照子の関係
- 五、語り手の欲望

第五章 中国を語ること——「南京の基督」論

- 一、中国の変容と金花の物語
- 二、母胎回帰の物語
- 三、語りの性質
- 四、外的焦点化のパースペクティブ
- 五、語りの欲望と戦略

第六章 愛と権力——「妙な話」論

- 一、探偵小説への近接
- 二、「貞淑な妻」になる物語
- 三、天皇制国民国家体制
- 四、超感覚の権威性
- 五、エリートたちの欲望

第七章 保吉物と軍隊——「保吉の手帳から」「あばばば」「寒さ」

- 一、芥川龍之介と軍人
- 二、「保吉の手帳から」
- 三、「あばばば」
- 四、「寒さ」
- 五、表現形態としての軍人否定

第八章 北京の駐在員の物語——「馬の脚」における日本人社会システム

- 一、移民の系譜
- 二、日本人社会システム
- 三、ナショナリズム
- 四、われわれの内なる野蛮／かれら
- 五、新たな共同体へ

第九章 旅——「湖南の扇」論

- 一、旅行と観光
- 二、メタファーとしての自然
- 三、周縁からの脅かし
- 四、『支那遊記』の表現技法と「湖南の扇」

五、エリートの保守性
終章
初出一覧
参考文献一覧

4 論文の概要

本論文は、選定された幾つかの芥川龍之介作品について、芥川が活躍した時期に知識人という用語が普及していたことから、知識人という身分集団（教育の種類による生活様式の違いに基づき肯定的／否定的特権づけがなされる集団）、あるいは自ら知識人としての作者が、他の身分集団（大衆、外国人、軍人、理系知識人、インテリ女性など他の身分集団）に属する人たちに出会う時に働く欲望や戦略を描いているとして、芥川文学の読みの深度を深めることを目的として書かれたものである。ここでいう欲望とは、身分集団の異なる者との出会いによって生じる、脅かしの感情や、彼らをコントロールしたいという感情、また彼らを相対化したいという感情のことであり、戦略とは、己の身分集団に益するために採用される方策、あるいは欲望を抑え込むために採用される方策のことである。

序章では、大正期に知識人という用語がどのように使われていたかを確認した上で、芥川文学における知識人について概観し、本論文の問題意識と目的を述べている。

第一章の「片恋」（1917・10）論では、ハイカラ文化との差異化を余儀なくされる農民的エートスと西洋文化へのコミットメントを併せ持つ知識人の姿が描かれているとしている。横浜に住み外来の娯楽である映画を享受し西洋人俳優に恋しているお徳という芸者を語る「友だち」は「大学を出た」知識人であり、彼がお徳を冷笑するのは、ハイカラ文化によって不安を与えられ脅かされているからであり、自らの威信を再定位化するためであったとしている。

第二章の「首が落ちた話」（1918・1）論では、清の階級の低い騎兵何小二の人生を様々な人物が語っていて、そのうち木村陸軍少佐の語りは＜中国賤視の語り＞であり、山川理学士という知識人の語りは人間の発言を信用しない、データに重きを置くもので、軍人を己と差異化したいという欲望も窺えるとしている。

第三章の「葱」（1920・1）論では、性が放縦でもある点でモダニズム型の逸脱した知識人芸術家であるといえる田中君とカフェの女給のお君さんの物語を紡ぐ「作者」は知識人相手に小説を書く正統的審級の小説家であるが、その「作者」はモダニズム型知識人に脅かされ、民衆や女性との出会いによって、彼らを欲望のもとに囲い込んだり、表象不可能なものとして表現したりする物語だとしている。

第四章の「秋」（1920・4）論では、＜女の知の系譜＞と＜新中間層＞に対する語り手の対抗意識が描かれていたとしている。この小説の語り手は旧制高等学校を経た東京帝国大卒の正系知識人を特権化し、インテリ女性に対する警戒から、男性を同性間関係の親密さによって特徴づけ、その希薄な女性との間に断層をつくった。男女の差異化、＜女の知の系譜＞の貶価を図るのは、女性知識人の職業への道を閉ざすためだとする。また、＜新中間層＞と正系知識人との差異化も図られているという。この作品の背景にあるのは、女流作家が台頭し、女子大学が創設され、サラリーマン層の厚みが都市部を中心に増し、知識人が増大した時期であり、このため、正系知識人は、傍系知識人との差異化を図る、貶

価する欲望に迫られたとしている。

第五章の「南京の基督」(1920・7)論では、第一に中国の近代化を描いている、すなわちオリエンタリズムの思考から免れ、日本と同じように中国に近代化を期待する点で、知識人側に立つ語り手の欲望を表しているという。第二に、母胎回帰の物語が見られることから、中国にエキゾチックな美を期待するオリエンタリズムの思考を併せ持つ知識人の二重の欲望が窺えるだろうとする。第三に、語り手に知識の排除(否定)と肯定との矛盾したスタンスがあることから、中国の娼婦を語る知識人の、娼婦と己とを差異化したいという欲望と、その欲望を抑え込みたいという戦略が読み取れるだろうとする。なお、大正期は、中国に関する言説が量産された時代で、「南京の基督」は、中国を語る知識人の欲望と戦略が読み取れるとしている。

第六章の「妙な話」(1921・1)論では、「私」の旧友・村上が、「私」と村上の妹・千枝子との不倫を、隠微に詰問した推理ショーであるとし、村上が擁護する千枝子の夫が第一次世界大戦後に外交的・軍事的に貢献した海軍の武官としてエリート中のエリートであったのとは裏腹に、「私」は朝鮮で働くことを余儀なくされたエリートの中での脱落者であることから、エリートの中の落伍者に対して温かなまなざしが、エリートの中のエリートに批判的な視座が注がれているとしている。東京帝大を経た正系の学歴エリートとしての作者は、軍隊エリートを相対化しうるものだったので、この作に軍人に対する貶価が見られるとしたのである。

第七章は、「保吉の手帳から」(1923・5)の〈わん〉、「あばばば」(1923・12)、「寒さ」(1924・4)の保吉物を論考の俎上に載せている。「保吉の手帳から」の〈わん〉では就きたくない教職に就いているという現状が、乞食に同一化するのに用いられ、権力との隔たりを作っているとし、「あばばば」でも、権力との隔たりを作る装置が見られ、エリートを平凡な人間として叙述することで、平凡な女の平凡な幸福を描くことを可能にし、海軍の欲望に抗しているとしている。高等教育は貧しい階層(プチブル)の子弟を基盤としていた。そのため知識人は、下層の人たちに同化しやすい。これら二作は、知識人としての欲望を抑え込む戦略が描かれていると言えるだろうとする。「寒さ」では文学者の造形に軍隊批判が見られるという。また、理学士と文学者を対比し、前者を公式主義的な人間、後者を、同情し、事物を〈個〉として見る人物として描いているとする。この作に文学部卒特有の矜持、人に対して同情し、具体性をもって事物を見るという、文学的なものの見方を誇りに思いやすいことを読んでみる。

第八章の「馬の脚」(1925・1, 2)論では、北京在住の知識人が、知識人としてのステータスシンボルに執着する様子が描かれているとする。衛生意識を身につけ、蓄音器をかけ活動写真を見に行くことで芸術を解し、洋服を着て日本間を西洋間に変えるという生活様式は、中間層にとっての理想的なものとして語られたものであった。ジャーナリズムで語られた中間層の理想的生活様式を取り入れる半三郎夫婦の生活は、異国で共同性を創り上げるのに役に立っている。その共同性が差別を招来するありようを描いているのがこの作であり、それを描くことで、知識人という身分集団の共属意識を風刺しているとした。

第九章の「湖南の扇」(1926・1)論では、知識人の保守性が描かれているという。中国の不衛生や中国人の攻撃性、中国の排日的趨勢や革命運動に脅かされる「僕」は、異国の他者性に脅かされているのだと言える。「僕」が脅かしを受けるのは、知識人が保守的だか

らである。知識人という身分集団は、現体制の中で特権を享受している。だから、現体制と異なる文化や、現体制に抗う運動には共感を示すことが難しくなるとしている。

終章では、芥川龍之介文学には、知識人が他の身分集団、あるいは他の知識集団と出会う時に働く欲望や戦略が描かれていて、それを明らかにすることで作品の読みの更新ができるかとまとめている。

5 論文の特質

本論文は、芥川文学の中で様々な知識人像や知識人の問題が描かれた作品を選定し、知識人の欲望と戦略という視点から、個々の作品を緻密に読むことに心がけ、先行研究とは異なる見解を多く示し、芥川作品の読みの更新をしたものといえるだろう。ちなみに芥川文学における知識人といった場合、中学校卒業以上の学歴を持ち、肉体労働ではなく、頭脳労働に従事している人をいい、具体的な職業としては、学者・将校・官公吏・会社員・事務員・教師・医師・弁護士などが挙げられるとしている。が、本論文では知識人でも学歴差に注目しているのが特徴的だといえる。具体的にいえば、「秋」論では、一高から東京帝大を卒業した者、高等商業を出た者、女子大学を出た者、女学校を出た者が主要な登場人物となっていて、その学歴差に着目することで、その人間模様を分析したことは、先行論の多い「秋」に新しい読みを提出できているといえるだろう。また、芥川作品にいわば執するのではなく、必要に応じて永井荷風の作品、泉鏡花の作品、谷崎潤一郎の作品などとの関係性に触れているのも本論文の特質の一つだといえる。むろん九章に渡って論じられた個々の作品論は緻密な分析がされているといえる。

6 論文の評価

前節で取り上げた本論文の特質が、そのまま本論文の評価すべき点となる。が、敢えてとりわけ斬新な作品論を挙げるなら、「片恋」論、「秋」論、「南京の基督」論、「妙な話」論、保吉もの三作についての論考、「馬の脚」論であると思われる。研究がどんどん進化しているといえる芥川龍之介文学研究の現況下でも本論文は高く評価されるに相違ないだろう。なお、本論文のような知識人のテーマで扱える芥川作品は、他に「毛利先生」、「開化の殺人」、「大道寺信輔の半生」、「たね子の憂鬱」などがある。しかし、本論文にも超克すべき問題がないわけではない。本論文では個々の作品論を展開しているが、それをトータルな芥川龍之介文学の中でいかに位置づけるのか、芥川龍之介という作家にいかにして脈絡をつけその作家像を切り結ぶのかという高遠だがそういう課題が残されているといえよう。しかし、これらの問題点は、論者自身が今後の課題として十分に認識しており、論者の研究者としての資質を否定する要素にはならないと考える。

7 論文の判定

本学位請求論文は、文学研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（文学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上